

対話型マップ記録の提案

○高橋陽子 佐々木麻美 佐藤寛子 田村郁 灰谷知子 谷地理沙
渡邊満美(お茶の水女子大学附属幼稚園) 小玉亮子(お茶の水女子大学)

はじめに

本園では、2019 年より継続している保育記録の様式「対話型マップ記録」がある。学年 3 人の教師が、園の簡単なマップが中心にある A4 サイズの用紙に順次その日のこと(子どものこと、遊びのこと、感じたこと等)を書いていくものである。

2020 年日本保育学会において、「動き出すドキュメンテーション(2)」(佐藤、小玉、高橋)の中でこの「対話型マップ記録」を紹介し、保育者同士の対話的關係性に視点を置いたドキュメンテーションの在り方とその工夫について考察を深めた。また海外の学会においても①2022 年 EECERA「Documentation in Japan: Focusing on the significance of dialogue」、②2023 年 PECERA「Development of interactive map recordings and documentation」、③2024 年 PECERA「Expanding Connections through Children's Language From the Practice of "Interactive Record with Map"」を発表し、それぞれの視点でこの記録の意味を探ってきた。①では「遊びのプロセス、つながりが見える記録であり、子ども理解が深まる」、②では「学年ごとに書く記録であるが同じ遊びにフォーカスしたことで、学年の特徴や本園の教育理念が確認できる」、③では「記録は教師の記憶に蓄積されている。様々な人との対話の中で記憶が呼び起こされ、子どもとの関わりに活きる」等の結果が得られた。これらのことは 2025 年 3 月萌文書林から『保育を綴る』という題名で出版予定である。

今回は、個人記録でもない、写真記録でもない、手で書くこの記録が、なぜここまで継続しているのか、経験年数も立場(常勤、非常勤)も違う複数人で書き合う

ことが可能なのか、子どもと共にある教師の心もちに何をもらっているのか、実際に書かれた記録から紐解き、「対話型マップ記録」を提案する。

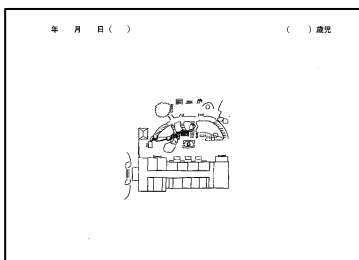


図1 対話型マップ記録用紙

「対話型マップ記録」とは

この記録様式が完成したプロセスは、「動き出すドキュメンテーション(2)」を参照されたいが、記録を綴る方法を簡単に記す。

園舎と園庭のマップを中央に載せた記録用紙に、保育後環境を整えた後、同学年3名の中で書ける教師から、その日の出来事で感じたこと、気になったことなど

を、自由に書く。残りの教師たちも時間のある時に、書かれている内容に触れて書いたり、別の場面での遊びの様子を書いたりする。そして、時間のないときには無理に書かなくてもよいようにしている。

最初に書いた教師が翌朝読み返し、他の教師と確認し合ったり、後日書き足したり、振り返ったりすることもある。最終的には、学年ごとにファイルし、いつでも読み返せるように職員室に保管している。

継続が可能になる記録

「記録を書くことが楽しい」と語る書き手たちである。

記録を書く時は、その時の気持ちで自由に書いているが、改めて振り返ると、「おもしろいと感じたことを書いた」「心に残ったことを書きとめた」「子ども同士のやりとりを残そうと思った」「改めて気づいたことを書いておいた」などその時々視点があること、実は過去からつながっていたり「次」に向かっていたりしていることが浮かび上がってきた。書けないことも含めて、思いのままに書くことが保障され、学年の教師間で共有でき、子どもの様子、他の教師の思いが伝わってくることで翌日の保育につながっていると実感できているからこそ、無理なく継続できるのではないかと考える。

学年2クラスの補助に入り、この記録のない時代も知る非常勤教諭は「記録があることで翌日のスタートが動きやすい。担任の考え、捉え、願いがわかって、そこに続く関わりができる」「記録の中で会話ができ、3人の教師の考えが重なり合って保育を進めることができる」、また1年目の非常勤教諭からは「担任と共有できる面白さを感じるようになってきた。担任の記録や自分の書いたことへのコメントから、子どもの捉えや関わりの視点を知ることによって次につながる」ことから継続できていると言う。

学年の記録には関わらないが園児たちと常に関わり、保育後は職員室で教師たちと共にいる養護教諭からは、「本記録は、書けない時の記録も残される。書けない理由は様々であるが、書けなかった理由を語り合う教師たちの姿をよく目にする。その後、補い合うような保育になったことが思い浮かぶ語り合いを聞くことがある。どんな時の記録も残していることが、その時々教師の心もちを記録から捉え、チームでの保育を支えているものになっているのではないかと感じる。また、3人それぞれの視点で子どもの記録を書き残した時、名前のあまり出てこない子ども、いつも同じ遊び、友達と関わっている子どもに記録から気づき、教師の関わりが少なかったことや書くことに偏りがあることが見えてくると語っている。記録を毎日書くことで、個の記録、自身を振り返る記録とし

でも活かされていると感じる」と、記録が継続していることによる効果が語られた。

いろいろな記録の実例

この項では完成した記録を振り返ることによる教師の気持ちの変容について報告し、まとめにつなげる。

記録1(3歳児 10月3日)

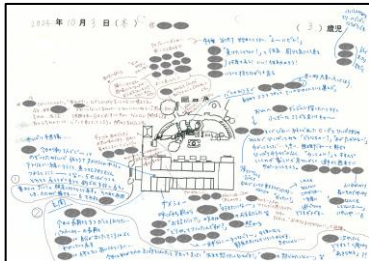


図2 対話型マップ記録10/3版

いろいろ自分を表し始め、教師(私)が驚くことをたくさんするようになり、保育中に困ってしまうことが増えてきた時期の記録

<記録より抜粋>

- ①玄関—A 児とB 児、今日もパステルカラーの(人)の長靴を出して履いていた…私が2 人の上靴を履いたら焦ってました。私「怒りたくない！」A 児「怒られたくない！」(思わず笑ってしまう)私「次やったら？」B 児「あきらめる」(どういう意味?)
- ②C 児—集まりはだっこ。(部屋から)脱走しようと繰り返す。その後、(畳にままごとの)布団を敷き、寝てる(笑顔でこっちを見て)…(喜んで)真似をするD 児。

この日の記録を読み返すと、子どもたちが遊んでいる姿より、困った姿の記録ばかりである。いろいろ自分を表し始め、教師(私)が驚くことをたくさんするようになり、保育中には、本当に困ってしまい、いっぱいいっぱいになるが、こうして記録を書き、客観的に子どもの姿を捉え直すと、それぞれの子どもの思いに気づく。遊びが見つからずにいる思い、友達に関わりたいが、どうしたらよいかわからない思い、帰りへ切り替わる時間への戸惑いなど、子どもの行為の奥にある思いを感じ、明日はどう関わろうか考える。

この記録は、自分の保育に対する評価を気にせず、ありのままを書ける。ごちゃごちゃと巻き起こることは、すんなりとは理解できず、書き留めずにはいられない。書くことで、子どもの思いを感じ、考えをめぐらせ、明日へとつながっていく記録である。

記録2(4歳児 10月29日)

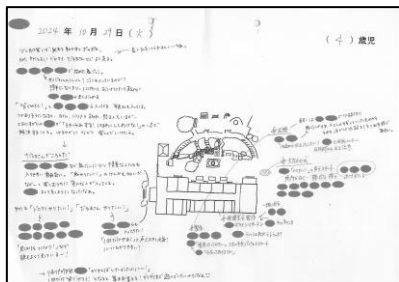


図3 対話型マップ記録10/29版

ここ数日、E 児はクラスでは昼食を食べたくないと言ったことがあった。安心して保育室で過ごせない E 児の様子に、担任としてはどう関わろうと焦りを感じていた日の記録

<記録より抜粋>

①A 教諭(非常勤教諭)

(保育室で初めて電車を作ろうとしていた)F 児「電車つくってみたい」3 本の牛乳パックからスタート(して作る)←E 児が『手伝ってあげようか』(と声をかけていた)

②担任(私) こういうのうれしいんだな。昼食時 E 児に「一緒にお昼ご飯を)食べたかった友達がいたのよ」と話すと「えー！」(と言う)。いろいろな友達の名前を出すと、E 児「じゃあ明日は F ちゃんと食べようかな」

その日の E 児は、保健室(廊下を挟んで保育室の向かい側)で多くの時間を過ごしてたように記憶していたが、一瞬戻ってきた時に保育室でクラスの友達にこんな言葉かけをしていたことを知り、はっとさせられた。「食べない」と厳しい表情の E 児に何と声をかけようかと途方にくれながら話しかけていた時に、ふと表情が緩んだ E 児の姿には、このような背景があったのだと A 教諭の記録からかみしめることができた。

子どもとの関わりに迷うと、真正面からぐいぐいと子どもに関わろうとして失敗したと反省することが度々ある。けれど記録の中で、他の教師から見た子どもの姿や言葉に触れると、そういう姿からあの表情につながったのだと新たな見方ができて、自分の気持ちが緩むような気がする。そして子どもの姿を多面的に振り返る余裕がほんの少し生まれてくる。反省して立ち止まるというより、また明日こそと前を向いて保育するために、この記録が役かっていることを日々感じている。

おわりに～だからこの記録を提案する～

写真を撮るときに一人ひとりの子どもが映るように、一人ひとりの子どもに丁寧に対応するように、と思うとき、その背後には、偏りがあってはいけなく、みな全員を等しく対応しなくてはならない、という気持ちがある。保育が一人ひとりの子どもに平等であることは重要なことである。しかし、そのために、枠をつけてしまっていないだろうか。そして、子どもたちの発達をみていくために、子どもの変化を、要素に分解して枠をはめてそこに進捗状況をみてはいないだろうか。本園の提案はそういった枠や要素からは全く自由な記録の提案である。

確かに、この記録には、偏りがみられることもある。しかし、記述に偏りがあるからこそ、先に論じたように、教師たちはそのことに気づき、そして、振り返ることができる。子どもの1日を一人の担任だけで、すべて平等にみることができないし、教師によって、見え方も異なる。だからこそ、ここに書かれた複数の記録から、自らでは知り得ない新しい視点をを得ることができる。そして、そこから、明日につながる手がかりを得られる。

何より、この対話の記録を支えているのは、日常的な対話である。記録のために記録をするのではなく、この記録は対話による記録であり、さらなる対話のための記録だといえると考えている。